

# 立命電友会

## 「台湾高速鉄道 建設工事に従事して」

技術士(電気・電子部門、総合技術監理部門)

富士田 忠弘

(昭和四十五年卒)



一、台湾の全般的印象  
 私は、台湾東芝WS (Wayside: 沿線給電設備) 工区副責任者として、二〇〇四年二月から約三年間(台南工区・一年、桃園工区・一年三月、全工区・六ヶ月)台湾に滞在した感想を述べる。気候は良く、すきなゴルフが出来、海鮮料理等健康に良い食材がそろい、親日家が多く、若い人も日本語を勉強しており、日常生活では不便を感じない。台南、高雄方面は住み易いところと感じた。  
 気候は大部分は亜熱帯気候で、

一般に高温多雨で夏は五月〜十月と長い。北部の台北は一月〜四月雨天が多く、年間最低気温は十二度前後で南部の高雄方面では、最低気温二十度前後で北部と南部で気温差は大きい。台南では二月に着任してから六月ごろまで一度も雨が降らなかった。四月頃から大変暑くなり、日中の仕事は暑くて進まず、夕方からの仕事の方がはかどった。  
 食べ物で、台湾料理は油濃が大変おいしい。特に飲茶・シウロロンポウは大変美味しいが、毎日食べるにさすがに飽きて来る。少し変わった食べ物は、蛇・小さいワニ・羊・臭豆腐等があり、臭豆腐は遠くを歩いているだけで、其の匂いで吐き気がした。国道などの大きな通りのあちこちで、全ガラス張りの小屋があり、ピンロウ(小椰の実に石灰を混ぜガムのように噛むと体が興奮)を売っている、Tバック姿の若い美人を見ることが楽しみであった。

- 二、台湾高速鉄道PJの概要
- ・建設コスト総額…約一・五兆円
  - ・総延長…三四六km(台北〜高雄)
  - ・高架…七〇%、トンネル…一五%、盛土・切土…一二%、鉄橋…三%
  - ・駅数…八駅(最終十一駅)
  - ・所要時間九〇分、最高速度…三〇〇km/h(車両タイプ…七〇〇系ベース、十二両編成)
  - ・建設方式…BOT 三十五年間
  - ・日本連合メーカーコンソーシアム(三菱重工、東芝、川崎重工)
  - ・工期(契約二〇〇〇年十二月、営業運転開始予定二〇〇六年二月)↓延期二〇〇七年一月五日)
- 三、電気概要
- ① 変電システム
- ① き電方式…AC二五kv ATき電方式(本線用変電所七箇所)
  - ② 変電所構成…三百六十一kv
  - ③ 二回線受電(常用)予備)
  - ④ き電変圧器…スコット結線五〇〜七〇MVA、二バンク構成(常用)予備)
- ② 車両
- ① AC二五kv一六〇Hz
  - ② 駆動システム…IGBTによるVVVF制御、三相誘導電動機駆動
  - ③ 編成出力…九九〇〇KW(編成 主電動機…二七五kw×四台×九両)
- ③ 信号設備
- ① ATC地上装置&車上装置
  - ② CTC装置
  - ③ 自動列車検知装置他
- ④ 通信システム
- ① 光ファイバーケーブル…中央司令所・駅・変電所・車両基地 情報伝送用
  - ② メタリックケーブル…沿線機器・駅間情報伝送用
  - ③ 同軸ケーブル…列車無線用

- ⑤ 配電
- ① 駅電気室より六・六kvを分岐、沿線に配電↓沿線一km間隔Tr六・六kv/三八〇vで降圧↓沿線負荷
  - ② 沿線負荷…作業用コンセント、高架用照明、トンネル照明、信号機器等
- 四、東芝施工範囲(全沿線長三百五十六km間)
- 変電設備、沿線給電設備(Wayside E&M)、列車無線設備
  - 運行管理設備、保守監理設備他
  - 五、現場管理の感想
- 新幹線の Wayside の仕事は、長距離の沿線作業管理なので、私が経験した今までの会社での管理の様に変電所等、其の場所だけの点管理であったのを、線管理方法に変えなければならなかった。
- SUBコン(下請業者)は台湾の業者、契約関係は英語で、現場の言葉は北京語、台湾語である。通訳を通しての会話なので自分の意思が本当に通じているのか、其の時点で分からない。(作業で、細かい点で不具合が生じる)
- SUBコンの作業班は寄せ集め集団で、作業レベルはまとまりが全然無い。
- どの様に、線上の管理をすれば良いか検討した。
- ① 指示は指示書を書き、SUBコンのSM(現場管理者)、安全担当者、PM(部長)がサインし、返却する方式をとった。
  - ② 重点事項、細かい注意は、SM、各作業責任者呼び、白板上に略図を書き説明した。
  - ③ 品質管理は現場抜き打ちチェックと、仕上がり重点箇所をSUBコンSMにデジカメで撮影させ、インターネットで送信させた。(最終は Walk through で細かく確認、試験Grが電氣的

- Check)
- ④ 安全管理はSUBコンの会社としての安全管理体制(部署)がなく、全体管理が出来てない。WS工区で直接指示し、各作業に安全担当者を配置、重点事項は指示書で指示↓実施事項を安全管理日誌で返却させた。
  - ⑤ 毒蛇に対する安全管理が必要であった。カット&フライド軌道上では、山から毒蛇が出てきて軌道のトラフ等に入っており、夜間工事では作業員が Cable と間違えるとか、沿線の Panel に登っておりロープに間違える事もあった。
  - 三次、四次下請で働いている、タイ人等は、蛇を生け捕りにして持って帰り食べてしまう。食文化の違いが有り、色々面白い面があった。
- 現場管理は相対的に台湾SUBコンの施工技術、管理能力は未だこれからであると感じた。(初めて海外工事で実感した)
- 六、最後に
- ・昨年十月、仕事が終了前に日本に居る家内を台湾に呼び、新幹線現場と台北、台南、高雄を案内し、約三年間の留守宅管理の労をねぎらった。
  - ・仕事の節目毎に、東芝WS関係者とSUBコンSM、作業責任者との親睦会食を行い、職場全体の親睦を深めた。
  - ・海外で仕事をし、国は違っても人と人の心は、繋がるものであると感じた。
- 今後、私が元気で居る限り、今まで培ってきた電気技術を核に幅広い経験と資格で、社会に貢献して行きたいと思っている。
- 以上

# 新任のご挨拶

電子光情報工学科

助教 北川 晃

二〇〇七年度四月一日より、助教として電子光情報工学科に着任いたしました。私は京都大学において量子光学／量子情報技術に関するテーマで工学の学位を取得した後、(独)情報通信研究機構の博士研究員を経て、この度立命館大学でお世話になることになりました。現在は左貝潤一教授の光情報通信研究室に配属されております。

私は幼少の頃からSFアニメなどに親しんで育ったせい、宇宙の神秘といったものに興味を持ち続けてきました。そして高校生のころよりのアインシュタインに憧れ、物理学者になりたいと思いついておりましたが、その後希望通りに物理系の学部へ進学することができました。理論物理学者を目指して、当初は素粒子に関する勉強から始めたのですが、大学院への進学と共に光に関するテーマに興味を持つようになりました。光というのは大昔からその存在が認知されていたにもかかわらず、長らくその正体が謎に包まれた対象でした。しかし二十世紀に入り量子論が確立されると、様々な側面が明らかにされてきましたが、現在でもその性質について研究が

続けられている、大変興味深い対象です。私がこれまで携わって参りましたのは、光をもっともミクロな視点から見ると、量子光学に関するテーマです。光の強度を弱めていくと、その最小単位である光子が現れますが、こうした微弱な光は粒子でありながら波のごとく干渉もするという、量子論的な性質を顕著に示します。近年こうした量子論的な対象を情報処理に応用する「量子情報技術」に関する研究が熱心になされていきますが、もしアインシュタインが生きていたら、大変に興味を持つのではなにかという気がします。現在の情報理論体系は、シャノンにより構築されたものが標準理論とされていますが、量子論的な光を用いた情報処理では、その原理的な限界をも超える可能性があるといわれており、次世代の情報処理技術として期待されています。

これまで私は、量子情報技術中心に研究して参りましたが、今年度より光ファイバに関するテーマにも従事しております。光ファイバは現在のICT社会を支えている大変重要なデバイスであり、その研究開発は確実に我々の生活に還元されるといってもよいと思います。今後私はこれまでに培った経験を生かしつつ、光ファイバの特性やその応用としての新たな光

情報処理技術の開拓を目指して研究していきたいと考えております。アインシュタインに憧れていた小僧は、何とか科学者としての門口までたどり着くことができたようです。しかし学生時代には、数学や物理学などの専門科目の講義について行くのが大変で、何度も挫折しそうなったのを思い出します。その後なんとか、必要な科目に関してはそれなりに理解することができましたが、自分が苦労してきたせいでしょうか、教員という職業にも憧れを持ちつつけてきました。そして、今の自分があるとき理解に苦しんでいた自分に説明をしたとしたら、果たして理解させることができるだろうか、ということをよく考えるのです。

これまでに私は中学・高等学校や短大で非常勤講師をさせていただき、たった一つのことを理解させることの難しさを経験して参りましたが、それでも私は学生さんが「わかった」といって喜んでくれる顔を見るのが大変うれいのです。今後もこれまでの経験を活かし、少しでも多くの学生さんに必要な知識を身につけてもらうことができるよう、精一杯の努力をさせていただきます。私自身、これからまだまだ学んでいかねばならないことばかりの若輩者ですが、立命館大学の発展のため微力を尽くさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

## ～ オール立命館デー in 東京 ～

### ALL-Rits 立命館校友大会2007のご案内

二〇〇七年度立命館学園の全国校友大会は、その他の数々の行事とともに「オール立命館デー in 東京」として、左記の通り開催されます。

立命電友会の皆様方におかれましても、万障お繰り合わせの上、ご参加いただきましたら幸いです。

日時 二〇〇七年十一月四日(日)

正午～午後五時頃

場所 東京国際フォーラム

(千代田区丸の内三丁目五番一号)

行事 校友大会、各種対談会、オープンキャンパス、キャリア交流サロン、その他

(詳しくは校友会報「りつめい」をご覧ください。)

立命電友会事務局

### 立命電友会第五回総会開催の予告

会則に基づき来年六月に第五回総会を開催いたします。万障お繰り合わせの上、ご参加のご予定いただけますようよろしくお願いいたします。

日時 二〇〇八年六月二十一日(土) (決定)

行事 一、総会

一、講演会

一、懇親会

場所 ホテルグランヴィア京都(京都駅ビル) (予定)

申し込み方法や会費など詳細につきましては、次回会報(来年四月発送)にてご案内申し上げます。

総会に合わせた年次同窓会の開催など、何かありましたら、事務局までご連絡賜りますようお願いいたします。

事務局長代理 高山

# 四十年間の私の立命館大学

## 井上和夫

(昭和三十三年卒)

毎週一日、私は立命館大学の教壇に立つ。五十年後輩の電子システム系の学生に私の専門の「制御工学」を教えることができ、何と幸せなことか。

朝九時の授業、十分前に教室に入ると、すでに十数名の学生がいる。学生と話をしていると自分の年を忘れる。

先日、衣笠キャンパスに行き五十年前の理工学部事務室あたりたたずむ。私の学生時代の事務室棟・階段教室のあった棟は跡形も無く、その広場は立命色の陶板で化粧された中層の建物に囲まれている。広場の木陰の椅子に座し学生時代に想いを馳せる。

五十年前の立命館大学には特別奨学生という制度があり、入試は英・数(二科目)・理(二科目)・社(二科目)・国の八科目入試で、毎月三千円が支給された。当時学費は毎月二千三百円で、私は大阪から通学していたが交通費もまかなえた。私の一年上の苜屋先輩も特別奨学生で、在学中いろいろとお世話になった。その数年後、苜

屋先輩はメーカーを経由して立命館大学に講師として着任され、私も後を追うように大阪大学大学院を経由して母校に講師として赴任した。苜屋先輩が三十五歳で教授になられ、私も翌年教授になり、研究・教育を母校で一緒にさせて頂いてきた。私が四十年間、何とか頑張ってきたのも、苜屋先輩に差を空けられないようにとの意識があり、走り続けてきたからだと思う。

私が学生の頃、登録単位に制限がなかったようで、私は数学物理学の講義を夜間部のものも含めて幾つか受講した。苜屋先輩と一緒にの時もあった。三回生時に四回生配当の「電子応用」を受講したが、内容は「制御工学」で、京都大学の近藤助教(当時)が担当された。この「制御工学」が私の永年に亘る専門になると思ってもいかなかった。私の取得単位は二百二十二単位であった。

当時、各教科の専門書は少なく、授業で旧制専門学校の教科書らしきものを使っている授業もあった

が物足りなく、電気学会が出版していた大学講座のシリーズ本を購入しそれを中心に勉強した。学生時代はとにかく勉強したという思いが強い。国立大学の学生に勉強で負けない気概をもっていた。在学中に電気事業主任技術者第二種を取得し、また、実力を試すつもりで受験した国家公務員上級試験も工学系の合格者の殆どが土木・建築系であったが、合格者百十名中十三位であった。電気工学科の同級生の畏友・矢田兄も私に近い成績で合格し、通産省の部長まで務められた。

私は立命館大学理工学部在職中、たいへん学生に恵まれた。大学院電気工学専攻に博士課程が設置されたのは一九七二年であるが、私の研究室には当初から博士課程の学生が毎年在籍していた。BK Cに移転して以後は各専攻とも大学院進学者が多く、博士課程の修了者も多数出ているが、衣笠時代は少なかった。私の研究室は衣笠時代に十二名の課程博士を出しているが、理工学部で最も多い研究室である。

また、私の研究室の出身者で国・公・私立大学の教授・准教授として活躍している方は十七名を数える。立命館大学にも荒木教授、亀井教授、政策科学部の三上教授、

森准教授、立命館アジア太平洋大学の李常勤講師など、衣笠時代の電気工学科小堀教授のご子息も私の研究室出身で、大阪大学大学院を経て龍谷大学理工学部の准教授をされている。変わったところでは、卒業後京都大学医学部に進出し、京都第一赤病院をへて医療看護系の大学教授をしておられる方もいる。鳥取大、また九工大を卒業し私の研究室にいられた方もおられるが、留学生の呉さんは神戸大学大学院の修士を経て博士課程で私の研究室にいられ、学位を取得し、電機メーカーの研究所を経て上海交通大学の准教授として着任された。昨年二月、上海で呉さんと奥さんの許さんにお会いしたが、許さんは私が十数年前に吹田市主催の中国語講座を受けたときの講師で、当時、神戸大学院生であった。現在、上海外語学院(大学)の副院長をされておられる。

また、私の研究室で博士課程を修了した舞鶴高専の川田准教授は六年前に「わかりやすい制御工学」の本を出版したが昨年で一万部を超えた。私は名ばかりの監修者であるが、専門書で一万部を越えればベストセラーであろう。

私の還暦の折には京都三条のロイヤルホテルで、定年の折にはホ

テルグランヴィア京都で卒業生がお祝いの会を開いて下さり、それぞれ約百名の卒業生が参加して下さった。

私は理工学部が衣笠からBK Cに移転し草津に理工学部のみ時に理工学部長を務めた。学科の増設、また広いキャンパスの責任も含め非常に多忙な年度であった。

さる七月末に、三十三年前に一年間客員研究員として滞在したカルフォルニア大学バークレー校がある街に一週間滞在しアウストラダー教授に再会した。また、私の研究室出身でバークレー校に長期滞在している長崎県立シーボルト大学の辺見教授にも会うことができた。

現在、私は地域では吹田市民合唱団に所属し、大阪城ホールでの万人の第九や吹田市の年末の第九にも参加している。その他、科挙遊びとか市民農園とか様々なことに関わっている。現役時代は研究・教育に熱中し、楽しかったが、現在は別の楽しみも知りつつあります。



# 立命館・電気工学科と私

米澤 正勝

(昭和三十六年卒)

私は京都で生まれ育ち、京都市立洛陽高校・電気科に進学しました。三年生となり就職も決まっていたのですが、卒業を控えた年に我が高校に立命館大学の末川総長が講演にお見えになりました。「未来を信じ、未来に生きる」お話しも私も大学進学が芽生えてきました。そうして進学するならば立命館大学の理工学部と何となく思いました。親に大学進学の希望を伝えた処、幸い理解を得ました。但し、第一志望の立命館以外に滑り止めとしての他の大学受験は認めないし、立命館の受験に失敗すると既定通り就職する事が条件でした。工業高校では週一時間の授業しかない英語はからきし駄目でしたが、数学・物理には自信があり、急ごしらえの大学受験でしたが、何とか合格することが出来ました。

英語は立命館に入ってから大学受験テキスト「新々英文解釈」を購入し勉強を始めました。又、衣笠キャンパス木造一号館で昼休みに英会話を勉強している「理工E S S」の存在を知り私も入部させて頂くことにしました。「立命館E S S」は本部が当時広小路キャンパスに有りました。主な活動の一つに他大学とのデスカッションミーティングが有りました。春は関東の大学が関西地区を回り広小路キャンパスにも来ます。秋には立命館が関東に出掛けます。私は三回生の時、「理工E S S」の枠で広小路キャンパスの方々と一緒に東京遠征に参加させて頂き、早稲田・明治・立教大学を訪問し「安保問題」等を討議しました。「理工E S S」独自の活動としても近隣の京都工繊大、京都女子大との相互に訪問しあつての討論会は懐かしい思い出です。衣笠キャンパスには工場のような鋸型建屋があり、其処に電気課程の教授室、実験室、大学院教室、図書室が在りました。私はこの大学院付設の図書室には大変お世話になりました。羽村教授の「発送配電」の宿題が出る直ぐに大学院図書室に出掛けます。関連図書を探すと回答は直ぐに見つかります。ずばら私は和訳せず原書を丸写しして書

きレポートを提出しました。羽村教授は大らかに受理してくださり、私は手間が省けて大いに助かりました。卒論は半導体物性論が面白く、井上勅夫教授に付きました。当時は未だ真空管の時代で半導体物性論の参考書が少なく、また大学に実験機材も無かったので大学院の図書室で米国会誌をお借りして、学会誌を参考に卒論を書き上げました。現在、衣笠キャンパス・中央広場になっている所が当時は野球場でした。外野席の芝生で電気科の仲間と一緒にお昼のお弁当を食べたり、放課後は現在の以学館の所が広場でしたが其の所でソフトボールを楽しんだりしました。四年生になると当時必須課程だった「夏季学外実習」事業所一覧表が電気工学科掲示板に貼り出されました。私はクラス仲間と三名で日立製作所・国分工場へ七月中旬から一ヶ月間夏季実習に出掛けました。

毎日、指導主任へのレポートの提出が義務付けられていました。主任一課長一部長一勤労経由でコメントが帰って来ました。実習中に本社人事部主任が工場に来られ実習生全員との個別面接もありました。実習が終了すると私達クラス仲間三名で東北・仙台の七夕祭り・中尊寺・松島・十和田湖・北陸・金沢と一緒に旅行しました。夏季実習も楽しい旅行から約一ヶ月振りに帰宅すると日立より入社内定通知が来ておりました。卒業式は広小路キャンパスでありました。末川総長の「諸君は二十一世紀まで生きる。未来を信じ大いに活躍を願いたい」の訓示が有りました。式終了後、仲間二十名程で末川総長を囲んで記念写真を撮らせて頂きました。

日立製作所では当時「技術の日立」を標榜しており、顧客に接する営業マンが技術の説明が出来る様にと、営業所に技術系出身者を配属する慣わしが続いておりました。私は日立市での一ヶ月間の新入社員研修の後、名古屋営業所に配属され当時、未だ規模が小さかった電子管、半導体の営業担当になりました。この仕事は東京に転勤したり、その後関連会社に移ってからも続き、私の一生の仕事となりました。お陰様で半導体の急成長と共に仕事の質の向上が要求される量も拡大し、私自身も大いに成長させて頂きました。

名古屋時代は立命館を定年退職された羽村教授が名古屋で教鞭をとられていました。

昭和三十九年五月電気卒OB十五名が集い羽村先生を囲んで懇親会を開催しました。東京に転勤後は井上勅夫教授が上京をされたのを機会に昭和五十五年四月電気卒OB三〇名が集い楽しい懇親会を持ちました。その後、沖津（昭和三十年卒）、池田（昭和三十三年卒）両先輩の肝いりで、関東在住電気卒OB会として「関東立電会」が組織される事になりました。第一回「関東立電会」が昭和六十三年一月東京「日立金属・和彊館」にて開催されました。電気教室より浦山教授、井上教授、校友会東京支部より降旗支部長、小山副支部長にもご出席頂き総勢五十一名の参加者で盛大に楽しく開催されました。その後も不定期ながら開催を続け、今年で第八回目を開催することが出来ました。昭和三十六年卒クラス会は卒業後は毎年開催されていましたが、その後は卒業二十、二十五、三十周年節目で夫人同伴で開催されて来いています。最近幹事も交替で三年毎に開催することになりました。二年前は京阪神在住者が幹事で箱根・湯河原で開催されました。来年は中部在住者が幹事担当です。其の三年後には仙台在住者、又、其の三年後は関東在住者が幹事予定で各々の地で開催予定となっています。どのような企画が提案されるのか今から楽しみにしている処です。

以上

# 学生時代の回顧

## 藤田 征吾

(博士課程後期課程一回生)

私が立命館大学の電気電子工学科に入学したのは、二〇〇一年四月でした。そして、本年の四月から立命館大学博士後期課程へと進学することとなりました。気がつけば、入学して以来早いもので、六年が経過します。

この度、幸運にも現在に至るまでの経緯を回顧する機会を与えていただき、自分自身を振り返る上でよい機会と思ひ、稚拙ながらお話しさせていただきますと思います。私は、父の仕事が電気工事ということもあって、幼少のころから電気工具をいじったり、それを使って物を作ったりすることが好きでした。また、中学生、高校生の頃は休日や長期休暇のときは父の電気工事の手伝いをするようになり、普段何気なく利用している電気を實際利用できるようにするまでの大変さを知り、そんな仕事をしている父になんとなく憧れを持つようになつていきました。こうした経験もあって自分も電気系の道に進みたいと思ひ、電気電子工学科を受験し、見事立命館大学に合格しました。

そして、二〇〇一年四月立命館大学の電気電子工学科に入学し、これから始まる大学生活への期待

と新たな環境への不安を抱きつつ私の大学生活が始まりました。入学当初は、計画通りに単位を取得して大学四年間で専門的な知識を身に付けて卒業しようとする気になつていたのですが、新たな環境と内気な性格から、周りの人たちになかなか溶け込めず、分らないことがあつてもそのままにいたりして、一年目から単位取得につまずいてしまいました。しかし、このままではいけないと思ひ、自分から積極的に話しかけるように心がけ、講義や実験などを通して友達ができ、二年目からは計画通り単位を取得できるようになり、充実した大学生活を送ることができました。そのとき出会った友人達は学問に対して非常に前向きで、いろいろな資格に挑戦して

いました。そんな友人たちに刺激されて、自分も何か資格を取ろうと思ひ、自分なりに資格を取ろうと思ひ、大学の仕事を手伝いでCADを利用して設計図を描く機会があり、使い方などを勉強していたのでCADの資格に挑戦することにしました。そして、大学のエクステンションセンターを活用して、資格の講座に参加しCADの資格を取

得することができました。もし、

このような友人たちと出会ってなかったら、資格に挑戦するという前向きな気持ちにはなれなかったと思ひます。

学部の一回生のとき、研究室を決めるにあたり、いろいろな研究室の説明を聞いて、友人たちとの研究室にしようかと悩んだ結果、最終的に杉本末雄先生の研究室に決めました。杉本研究室では、GPS、画像処理、音声可視化などのいろいろな研究テーマがあり、どのテーマも面白そうだったので、その中でも特に興味を沸かしたのは、今や当たり前のように自動車、携帯電話などに搭載されているGPSについて研究していることでした。私は、昔からカーナビゲーションはどうやって位置を求めているのだろうと疑問を持っており、その仕組みを自分で研究できるといふのが大きな決め手でした。仮配属された当初は、大学院に進学するか就職するかで迷っていましたが、先輩方の研究に対する姿勢を見て、自分もより専門的な知識を身に付けたいと思ひ、大学院の博士前期課程に進学する決意をしました。

学部の四回生になり、研究室に正式に配属され、今までの学問に対する意識が大幅に変わりました。これまでは、試験のための勉強という意識が強く、ただ漠然と勉強していたのですが、研究室に配属されてからは、自分でやりたいテーマを決め、自分なりに考えながら取り組み、先生や先輩方にご指導

いただき、試行錯誤して研究を行

うということに私は学問の面白さや深さを知りました。大学院生になると、新たに配属された四回生に指導する立場になり、四回生に指導する反面、自分の理解しきれない部分も再確認する良い機会でもあり、より一層熱心に研究に打ち込めました。特に、私の研究テーマは企業との共同研究のテーマでもあり、企業の研究開発に対する厳しさに触れながら、緊張感を持って研究に取り組めました。そして、研究成果報告として、いろいろな学会に参加する機会も増え、初めて海外にも行くことができました。大学院の一回生のときに初めてアメリカの学会に参加し、そのときは自分の発表はなかったのですが、世界中で行われている研究に触れることができ、とても貴重な体験をさせてもらいました。そして、就職活動をする時期になり、就職するか後期課程に進学するかでも悩みました。杉本先生に後期課程に進学しないかと最初言われたときは、「就職するつもりです」と答えていたのですが、研究が非常に面白く、より専門的な知識を身に付けた研究者になりたいと思ひ、大学院に進学する決意をしました。後期課程に進学すると決めてからは、今まで以上に熱心に研究に打ち込みました。そして、大学院の二回生では、オーストラリア、アメリカなどの国際学会に参加し、研究成果を発表する機会があつたので、相手に説明しようと思ひ

ました。後期課程に進学した今、改めて思うことは先生がいつも言うように人生は「縁」だと感じています。私が立命館大学に入学した頃は、学部で卒業すると思つており、ましてや博士課程後期課程に進学するなんて一切考えていませんでした。それが今となっては、後期課程に在籍しているのです。もし、杉本研究室に配属されていなかったら、今どうなっているかわかりません。改めて杉本研究室に「縁があつたのだと感じています。

今は、まだこれからの自分の将来がどのようになっているのかは漠然としか想像が付きません。しかし、博士後期課程に進学したという好機を無駄にしないよう、一歩ずつ着実に自分の理想に近づけるよう努力していきたいと考えております。そして、その理想に向かう過程でどんな経験ができるのか、その先に待つ自分の未来はどうなっているのかを考えると私は今、胸高鳴る思いで一杯です。

最後にこのような表現の機会をいただきましたありがとうございます。また、学びの場と機会を与えてくださった杉本末雄先生をはじめ、ご指導、ご支援いただいた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自分の活躍をもって感謝の意を表していき

たいと思ひます。

また、学びの場と機会を与えてくださった杉本末雄先生をはじめ、ご指導、ご支援いただいた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自分の活躍をもって感謝の意を表していき

たいと思ひます。

また、学びの場と機会を与えてくださった杉本末雄先生をはじめ、ご指導、ご支援いただいた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自分の活躍をもって感謝の意を表していき

### 「関東立電会」が 開催されました

昭和六十三年一月、第一回関東立電会が東京「日立高輪・和彊館」で五十一名の参加者で開催されて以降、不定期ながらも今年で第八回目を平成十九年六月二十九日（金）一八・三〇〜二一・三〇開催する事が出来ました。

開催場所は何時ながらの「和彊館」です。参加者は十六名と寂しい出席者数でした。

第一部は立命館パンサーズOBで現在、立命館東京キャンパスの杉山課長に「熱狂の関西アメフト三強時代」と題して液晶プロジェクトを使用してご講演を頂きました。過去の立命館パンサーズは下位低迷のチームでした。然し、下記理由により創部五十年にして初優勝出来た由です。①BKC移転、トレーニングジムの新設、②米国式のチーム作り、③チーム構成員の役割と権限の明確化、④様々な改革による意識改革。私達の活き様にも直結する素晴らしいお話で大変参考になりました。

第二部は総会で関東立電会・松田会長、立命電友会・荒木会長のご挨拶を頂きました。荒木会長からは出席者数を気にせず本会を継続して続けて行く事が大切である

と激励されました。引き続き高山教授からは学園の近況報告を頂きました。

第三部は懇親会で美味しい中華料理に舌鼓を打ちながら出席者全員の近況報告を聞かせて頂きました。

少人数ながらも親近感を覚えた楽しい一時で予定時間を三十分もオーバーしてしまいました。今後は出席者全員が一名ずつ仲間を誘い合って仲間の輪がモットモット広がる事を誓い合い、校歌、応援歌を全員で唱和してお開きになりました。

今回の開催に当たって電友会事



務局のご協力で開催通知の作成、出欠の回収まで実施して頂き、当方の事務局としては大変助かりました。厚く御礼申し上げます。

米澤 正勝（昭和三十六年卒）



### 溝尻先生 退職記念パーティ

今年の三月末日をもって、電気電子工学科の溝尻勲教授が本学を定年退職されました。溝尻教授は昭和五十年に本学に着任され、その後三十余年の長きにわたり、大学の発展・学生のご指導にご尽力下さいました。

溝尻教授の永年に亘る研究と教育指導に感謝申し上げますため、溝尻研究室の卒業生による退職記念パーティを平成十九年四月二十九日にホテルグランヴィア京都にて開催いたしました。

当日は溝尻教授ご夫妻をお迎えし、研究でお世話になった先生方にもご出席いただき、研究室発足時から昨年度の卒業生に至る百名近い出席者で盛大なパーティとなりました。これも偏に、溝尻教授のお人柄、また、ご指導の賜物だと思われました。

パーティは、来賓の先生による挨拶及び乾杯で開宴となり、しばし歓談となりましたが、溝尻教授の周りには多くの卒業生が集まり懐かしい思い出話や近況報告などに花が咲いていました。

最後に、溝尻教授から近況報告を交えたご挨拶をいただき、全体での集合写真の撮影をもって、終

宴となりました。しかし、終宴後も会場の外では、溝尻教授を囲んで人の輪が膨れ上がり、いつまでも話が途絶えることはありませんでした。

記 小矢 美晴



同窓会だより

なままる電友還暦記念会

(一九七〇年、昭和四十五年卒)

平成十九年六月三十日午後六時に京都駅前の「さと茂旅館」に集合、井上和夫先生と前田稔夫先生にご出席頂き、総勢三十名(同期二十六名、同伴二名)で第五回なままる電友還暦記念会は開催されました。

まず、井上先生から立命館大学の発展振りと先生ご自身の近況を伺いました。先生は、合唱や家庭菜園、さらに立命館大学で講義されるなど充実した定年後を送っておられ、今年、還暦を迎える我々には定年後の生き方の参考にもなり全員聴き入りました。次に、前田先生のお元気で力強い乾杯のご発声で座は一気に盛り上がり、あちこちで近況や学生時代の思い出、今後の生き方、さらに新しい技術に関する情報交換などの話に花が咲きました。

続いて、恒例となった自己紹介と近況報告。卒業後、同じ会社に勤め定年を迎えた人、途中で転職した人、独立して会社を起した人、思いがけないことから苦しい立場に立たされた人、電気工学科から離れ別の分野に転じた人などな

ど、同期生の様々な生き方に接することができました。予定していた懇親の時間は瞬間に過ぎ、校歌、応援歌さらに寮歌を合唱し、記念撮影の後、締めとなりました。

その後、宿泊の部屋での二次会。ここでも大いに盛り上がり、時間を忘れ飲み、語りました。そして、次の日の朝食後、次回を約束して三々五々、記念品(大学名入りのマグカップ)を手にそれぞれの場所に帰っていきました。

学生時代の四年間を同じ時代・場所でも過ごし、卒業後いろいろな環境の中で働いた同期生が三十数年を経て再会し、その後の歩みや今後の夢を熱く語り合う、本当にすばらしい時間です。次回は二〇〇九年六月、今回参加できなかった



た多くの皆さんの参加を期待します。楽しい時間を一緒にしましょう。(記 南原 英生)

九州支部総会開催

平成十九年六月九日に第七回立命電友会九州・沖縄支部総会が開催されました。地上デジタルの電気設備見学会、福岡タワーの地上百二十三mでの懇親会と楽しい一日となりました。遠路から、荒木会長、高山先生、杉本氏に参加いただき学園の近況報告などをしていただきました。来年も六月の第二土曜日に開催しようということになりましたので、ぜひ皆様にもご出席いただけたらと思います。



訃報

卒年	氏名	生前
昭2年	古野 輝雄	7年前
昭7年	鍋田 捨夫	
昭11年	久須美嘉一	平成16年
昭12年	栗野 虎一	平成18年12月10日
昭13年	内山 勉	平成17年12月19日
昭15年	田中 茂	4年前
昭16年	大幡 義夫	平成18年4月8日
昭17年	吉田 智章	平成19年3月19日
昭19年	家田 昌一	平成19年1月6日
昭22年	浅田 忠雄	平成18年12月末
昭22年	寺島 一郎	平成17年12月25日
昭23年	杉本 保	平成19年1月
昭24年	奥村 信郎	
昭26年	前田 義郎	平成16年11月3日
昭26年	横井 正和	平成14年5月1日
昭26年	田中 達男	平成18年8月
昭26年	八木敬之佑	平成12年6月7日
昭32年	垣谷 美次	
昭32年	鈴木 健次	
昭34年	小西 一彰	平成19年5月19日
昭35年	北田 昌烈	平成19年5月3日
昭37年	鈴木 良一	平成18年12月23日
昭40年	柴田 英二	
昭45年	山村 有造	
昭45年	井口 行弘	平成7年4月
昭45年	酒井 次郎	平成14年12月27日
昭45年	一円 克	平成19年1月
昭46年	城 益雄	平成17年1月8日
昭4年	新名 正	

お知らせ

昭和三十五年卒の樋口暉之様から「電気設備(家用電気工作物)の知識」という題名の本を日刊工業新聞社のご厚意により出版されたそうで、御寄贈いただきました。「自家用電気工作物と呼ばれる電気設備は大学では学ばない

分野と理解しております。この本は中程度の自家用電気工作物について、知識として知っておきたい方にはお役に立つのではないかと思っています。」とおっしゃっています。興味のある方は是非ご覧下さい。(立命電友会事務局)

事務局便り

立命電友会会報第三十号の発行にあたり、ご寄稿いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。

来年の六月には第五回総会が開催の予定です。それに合わせて同窓会はいかがでしょうか。同窓会に行くかどうかの思い出を語り合うだけでなく、これからの人生を豊かにしてくれる場でもあります。案内の発送や出欠の取りまとめ等、お手伝いもさせていただきますので、是非ご一考ください。

立命電友会連絡先  
〒五二五-八五七七  
滋賀県草津市野路東一丁目  
立命館大学理工学部電子システム系内  
立命電友会事務局 川畑 良尚  
宮林(月・木)  
電話 〇七七(五六二)二六六二  
FAX 〇七七(五六二)二六六三  
E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp  
http://www.ritsumei.ac.jp/se/pr/denyukai/  
(会報の題字は久保之俊氏)